

中井履軒『世説新語補』雕題本考

稲田 篤信

一 はじめに

大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵本『世説新語補』は中井履軒が書き入れを施した本で、『懷徳堂文庫目録』に「中井積徳雕題」、帙には「履軒首書」とある。内部に成立の時期を徴すべきものはないが、複数の筆遣いからして、何度かの読書を行って書き入れられたものと思われる。

『世説新語補』二十卷十冊は、元禄七（一六九四）年に京都の林九兵衛から「李卓吾批点」を称する明版を元にして和刻本が刊行され、安永八（一七七九）年には同じく林九兵衛から戸崎允明による校正改刻版が出された。履軒が書き入れに用いたのは元禄版本である。十冊の各表紙には、『世説新語補』二十卷の卷一徳行以下卷二十仇隙までの三十六部門の名目（以下、篇名）が朱書されている。また第一冊には、「薛千仞云士大夫家年少子弟必不宜使読世説未得其雋永先習其簡傲不可不慎」の鑑戒の文章が朱書されている。

この中に、履軒の読書研鑽の跡を示す数多くの批注が書き入れられている。¹⁾書き入れは、欄上、欄眉、本文行間、ノドに、校語、句読、傍線、送り仮名が朱墨両様で記されている。また、釈大典『世説鈔撮』・桃井源蔵『世説新語補考』など

のわが国で作られた注釈書、『晋書』、『隋書』、『資治通鑑』などの史書、『野客叢書』などの隨筆、『類書纂要』などの類書、方以智『通雅』などの辞書、李贄『初潭集』、『語林』などの関連書など、履軒の学識がうかがわれる諸書を援用した注釈が墨書で記されている。

書き入れの中には、こうした注釈とはまた別に履軒一家の言とでもいうべき人物評価や内容批評が見られる。その中には履軒が『世説新語補』各篇の名目と各章の記事の内容が合致しないと判断して、「何之有」、「此何足載」などの表現を用いて、本文それ自体を批判しているものがある。小稿ではこの内、「何之有」の語法を用いた例を取り上げて、履軒の『世説新語補』評価を一瞥してみたい。

「何之有」の語法は、「之が句間にあつて、「何・之」と句を成した場合、「コレ」と訓み、「何」と照応して一句をなし、「そんなことが」と勁拔・奇警の感を与える」ために用いられる語法である。^②「なんノ・カコレあラン」と訓み、意味は、「反語文の固定した形態の一種で、「いったいどのような・あるか」の意」^③である。履軒と『世説新語補』に即して言えば、各人物の行状に照らして、各篇の名目にふさわしい内容であるかどうかについて、疑問や異論を提出したり、あるいは登載される意義自体を認めないことを表現する語法である。

履軒はこれを該当の人物記事の欄上、欄眉、直近のノドなどの余白に墨筆で書き入れている。本書全体の注の書き入れの体例は、履軒『古文真宝雕題』の記入方法を調査した南昌宏の整理に齟齬するものはない。^④

取り上げるのは、次の序中の言説および二十七名の人物である。この内、古世説から『世説新語補』に新たに追補されたのは、丸印を付した郭文举、淮南子、謝安、楊再思、郗嘉賓、許子将の五名であり、その他はすでに古世説に収録されている人物である。

卷一德行上 殷仲堪 殷覬 ○郭文举

第二冊 卷四文学上 ○淮南子

第三冊 卷六方正上 郭准

第四冊 卷七方正下 向雄 王丞相 桓温 王藍田 阮光禄 桓温 羅君章

卷八雅量下 顧和 庾大尉 ○謝安 道安 ○楊再思

卷八識鑑 ○許子将

第五冊 卷十賞誉下 謝太傅

第八冊 卷十六工芸 鐘会

卷十六任誕 阮渾 祖車騎 任愷

第九冊 卷十八排調 顧長康

第十冊 卷十九佞譎 魏武・袁紹

卷二十紕漏 任育長

二 袁褰序

和刻本『世説新語補』第一冊には王世貞序に始まっていくつかの序が登載されているが、「李卓吾批点世説新語補旧序二首」は劉応登と袁褰の序である。後者の袁褰序の一節に、「竹林の儔、沂楽を希慕し、蘭亭の集、堯風を咏歌す。陶荊州の勤敏、謝東山が恬鎮、莊易を解するときは、則ち輔嗣と平叔は其の宗を擅にし、梵言を析つときは、則ち道林法深其の乗を領す」とある。

竹林の七賢のともがらは、沂水で舞い歌い、楽しむのを願ひ、蘭亭の集まりでは堯の世を讃え詠む。陶荊州（陶侃）は勤勉で聡明、謝東山（謝安）はやすらかでおちつきがあり、莊子と易を解するときには、輔嗣（王弼）・平叔（何晏）の独壇場で有り、梵言を解析するときは、道林（支道林）・法深がその法を理解している、といったほどの意味である。

履軒は袁粲序に対して、「△王何の莊易に於ける、毫も發明なし。但し能く之を榛蕪と為すのみ。○東山の恬鎮、能く符堅に効きて、王敷に施すこと能はず、恐くは不足多く賞灑するに足らず。焉に乃ち觴詠設楽して耻無しこと亦た甚し。何の堯風か之れ有らん」（序・11ウ〜12オ・ノド 以下序を省略）と述べる。

王弼・何晏は莊子・易に何一つ新知見を述べていない。むしろ混乱させただけだ。「榛蕪」は草木が乱れ繁ること。謝安の欲のないおちつきは、符堅の思うがままにさせただけの効き目に過ぎず、王敷には効かず、不足が多く、褒め称えるに値しない。結局、酒を飲み、詩を読み、楽しみを尽くして、恥としない。どこに堯風があったものか、と代表的な世説人物には賞すべきものはないと手厳しい。

この袁粲の序文の一節に係わって、欄眉と欄上（12オ）にも次の四条の意見が書き付けられている。上記の文章を個々に説明したものと読むことが出来る。

斯の文援据する所、皆理を失へり。竹林の士の若きは、固より称すべきもの無し。何ぞ沂楽を汚さんや。

蘭亭筆墨を特筆して賞せられるのみ。且つ江左に偏に安んじて坐視し、京洛傾覆し、海内塗炭すれども、安んじて目前を愉しむ。

陶荊州是れ清談の人を憎疾せり。乃ち清談を以て重きと為す据ならんや。

梵言則ち清談の本源、其の淑慝論するなきのみ。

竹林の七賢にもともと賞賛すべきところなどない。どうして「沂水の楽しみ」（『論語』先進）を汚すだろうか。蘭亭は筆墨を特に取り上げて賞賛したものであり、都が転覆し、国中塗炭の苦しみをなめているのに、江南で安んじて坐視し、自分

ただけで目前のことに楽しんでるだけだ。陶侃は清談の人を憎んでいた。清談が重要視する証拠になるだろうか。梵言は清談の本源と言うべきものである。善し悪しを論ずるまでもない。

いわゆる世説を代表する人物がことごとく批判されている。ここに中井履軒の古世説および『世説新語補』に対する基本的な姿勢をみることができるといえる。ちなみに欄眉には「李云」として、「何ぞ必らずしも此の如くならん」とする李贄（李卓吾）の評語がある。履軒は相通するものを感じたであろう。

三 德行

『世説新語補』卷一德行上に取り上げられて、どこに高尚な行いがあるかと評された人物は、殷仲堪、殷覲、郭文挙の三名である。

殷仲堪の章は古世説に収められている（德行40）。次のような話である。

殷仲堪が荊州の刺史であった時、水害で凶作であったため、食事は五椀のみ。落ちた飯粒を拾って食べた。子弟の教訓のためでもあったが、質素な人柄によるものである。殷仲堪は、「貧は士の常である」と子弟に語った。

履軒はこの章に対して、「此れ何の德行か之れ有らん」（卷1・20オ・欄上 以下巻数を省略）と注している。本文の欄眉には、劉辰翁の「劉云く、五盃即ち少しと為さず」という評語がある。これが履軒の批判の根拠を代弁するものである。（元禄版本では「不為必」とあるのを、安永版本は「不為少」に改めている）。履軒は殷仲堪のわざとらしい作為を嫌ったのであろう。

殷覲の章は古世説に収められている（德行41）。次のような話である。

桓南郡は楊広とともに殷仲堪をそそのかして、いとこの殷覲の南蛮校尉を奪ってみずから勢力をひろめよと勧めたが、殷

覬はあらかじめこれを悟って行散にかこつけて官舎を出て、そのまま帰らなかつた。そして憤らず何事もなかつたかのよう
に振る舞つた。時の人は殷覬をほめた。

履軒はこの章に対して、「怯弱大いに甚し。術無きこと大いに甚し。正に是れ無聊の極、何の徳行か之れ有らん」(20ウ・ノド)と殷覬のいくじのなさと無能を指摘している。

安永版のこの記事の欄眉には、元禄版にはなかつた劉辰翁の「劉云く、此の如く官を去るは、亦た大に善し」の評語が新たに付け加えられている。履軒と評価が分かれる。

郭文學の章は『世説新語補』に追補されたものである。書き下し文にして示すと、次のような話である。

郭文學は呉興余杭山の窮谷の中に入り、木を樹に倚せ、苔覆して居る。都て壁障無し。余杭の令顧颺贈るに、韋袴褶一具を以てす。文學納れず。使者室中に置いて去る。乃ち衣爛るに至て、竟に服用せず。

「苦」は屋を覆う草。「韋」はなめし皮。「袴褶」は騎服。

履軒はこの章に対して、「何の徳行か之れ有らん」(24オ・欄上)、ただのやせ我慢だと評す。欄眉には、李贄の「李云く、味無し」の相呼応する評語がある。

四 文学

卷の四文学上は、文辞、文章にすぐれた者を称賛した章である。履軒に言及された人物は淮南王である。古世説にはなく、『世説新語補』に追補された人物。書き下し文は以下の通りである。

淮南王は鴻烈二十篇を著す。淮南子と号す。自ら云ふ、字中皆、風霜の気を挟む、と。楊子雲以為く、一出一入、字千金に直る、と。

履軒は「鴻烈二十篇」に付された劉孝標注、「鴻は大なり。烈は明なり。言は大に礼教を明らかにするを言ふなり」を念頭に、「淮南子何ぞ礼教の之れ有らん」（19オ・欄上）と評している。『淮南子』、また『鴻烈』、また『淮南鴻烈』二二巻。漢初の黄老の著作に対して履軒が批判的であるのは当然であろう。

五 方正

卷六、卷七の方正篇には、八カ所にこの批評が付されている。方正は律儀、厳格なるふるまいである。

卷六方正上、郭准の章は古世説に収録される（方正4）。次のような話である。

郭准の妻が兄王凌の事件に連座して、処刑されることになった。准は妻を差し出したが、数万の人民は数十里泣きながら追慕したため、准は妻を引き戻させることにした。すると文武の官人は我が身の危急に赴くかのようにどっとかけだした。そこで准は宣帝（司馬懿）に手紙を送って、「五人の子は母を慕い、五人の子が命をおとせば、自らも生きていません」と哀憐を請い、妻を許してもらった。

履軒は郭准の行動に、「何の方正か之れ有らん」（20オ・欄上）と記す。郭准は求めに応じて一度は妻を差し出した。領民臣下の行動をみて、前言を翻した。履軒の批判は『八犬伝』の里見義実のような郭准の口の咎に対して発せられているのだろうか。あるいはまた、准の上書によって赦免した司馬懿についても同じ事が言えるのであろうか。

元禄版はこの郭准の章に「劉云く、語甚だ感動、飾次皆是なり」の劉辰翁評語がある。安永版には、これに「王云く、世語簡にして尽く。前後相応じ、叙事の工拙見ゆ」の王世懋評語が加わっている。『世語』は『世説新語補』劉孝標注の引書である。『魏志』郭淮伝注に引かれるという。そこには数万の百姓、文武諸官は「督将羌胡渠師数千人」であるなど、簡潔な文で書かれていることを指す。

卷七方正下の向雄の章は古世説に収録される（方正16）。次のような話である。

向雄は河内の主簿であった時、太守劉淮からいわれのない責任を問われて、処罰されて追放された。後に雄は黄門郎となり、劉淮は侍中になって、武帝（司馬炎）に仕えたが、二人は口をきかなかつた。武帝は君臣のよしみを結ぶように命じたので、雄はやむなく劉淮に挨拶にだけ行って立ち去った。仲直りをしない雄に武帝は腹をたてて、雄にたずねると、雄は「この頃の君子は人を退けるときに、淵に突き落とすようなことをする。私が劉淮の追っ手にならないだけでも幸いです」と言った。それを聞いて、武帝はそのままにしておいた。

ここに履軒はこの章に対して、「雄只だ是れ狭中にして剛腹のみ。何の方正か之れ有らん。且つ是れ天子に事ふるの礼に非ず」（3ウ・ノド）と評す。履軒は向雄のかたくなさを狭量、剛腹と評し、かつ、武帝に対して非礼であると批判している。履軒はさらに、「君臣の称、安んぞ甚だしく然らんや。自説未だ已に此の如くにあらず」とも記す。履軒は武帝、劉淮、向雄、三者の君臣の関係まだこのようなものとは考えたことがないとも述べている。

卷七方正下の王丞相の章は古世説に収録される（方正24）。次のような話である。

王丞相（王導）が江南にきた当初、呉の人々にわたりをつけたいと思つて、陸玩に縁組みを求めた。陸玩は「小さい丘に松柏は生えず、匂いのよい草とくさい草は同じ器に入らない。私は義として乱倫の基になるようなことは出来ない」と断つた。

履軒はこれに対して、「此れ自ら門族に誇る俗習、憎むべき者なり。何の方正か之れ有らん。且つ乱倫の語、錯謬して当たる所無し」と記し、さらに「亡国の顧陸と中興の王謝、争でか衡せん。且つ況んや却て高引し、敢えて乱倫の語を吐くべからず。耻無きこと甚だし。殆ど暁るべからずして、当時は乃ち此を以て勝と為す。習俗の人心を鋼ぐこと亦た甚だしからずや」（6ウ・ノド）と述べている。

履軒は亡国の運命にある顧・陸家と中興の王・謝家では比べものにならない。陸玩が通婚を断つたのは自らの門族をほこ

る俗習である。「乱倫」の語は当らず、その昔はそうであったが、人々の俗習にしばらくつけられること甚しいものである、と述べる。元禄版には「李云く」として、李贄の「今の時勢差べきなり」の評語がある。安永版には、「時」を「恃」に改めて、「今の勢を恃むは、羞ずべきなり」とする。王導を批判している。安永版はもう一つ「劉云く」として、「乱倫類せずを謂ふに似たり」と、乱倫とは釣り合わないと言っているようなものだという劉辰翁の評語が付け加わっている。

同じく卷七方正下の桓大司馬（桓温）の章は古世説に収録される（方正44）。次のような話である。

桓温が劉惔のもとを訪れたとき、劉惔は臥したまま起きなかつたので、桓温ははじきゆみ（弾）で枕を狙って放つと、たまは寝台と布団の間で碎け散つた。劉惔は「使君のあなたはこのようなところでも戦に勝とうとをしますのでか」と言う、と、桓温は後悔した顔をしていた。

劉孝標注には、「温は曾つて徐州の刺史たり。沛国は徐州に属す。故に温を使君と呼ぶ」とある。「使君」は刺史のこと。

履軒はこの章に対して、「此れは是れ忿狷なり。何の方正か之れ有らん」（8ウ・欄上）と評す。「忿狷」は短氣、の意である。世説の篇名でもある。方正篇ではなくそちらに入れるべし、という意味である。元禄版には「王云く」として、王世懋の「当に使君を以て句と為せば、義自ずと明らかなり」の評語がある。使君一語を句として読んで、使君であれば、刺史のくせに、と読めということであろうか。安永版には「劉云く」として、「怒るがごとく、笑ふが如し。馨の如きは即ち此の如し」の劉辰翁の眉批が加わる。「馨」の語釈である。

履軒はこれらに加えて、「考云く」として、桃井源藏『世説新語補考』の「馨の如き地は猶ほ此の如き処を言ふが如し。此の如き処は当に文雅を以て待つべし。何ぞ武暴を以て勝を求むべけんや。蓋し桓温の文雅無きを識るなり」を引く。履軒の意見を代弁するものとして引いたのである。

卷七方正下の王藍田の章は古世説では賞誉篇に収められているもの（賞誉74）を、『世説新語補』には方正篇に入れたものである。次のような話である。

王藍田が楊州に赴任したとき、主簿が諱を聞いた。そこで、王藍田は「祖父と父の名は海内に知られて、女の諱は門外に出さないものだ。だから忌むべき名はない」と答えた。

履軒は、「是れ自ら矜伐。何の方正か之れ有らん」（9オ・欄上）と王藍田の尊大なふるまいを批判している。欄眉には「李云」として、「言語」とある。李贄は言語篇に収めるのが適当であるとしている。

卷七方正下の阮光祿の章は古世説に収められる（方正53）。次のような話である。

阮光祿（阮裕）は成帝（司馬衍）の大葬に際して隠棲していた会稽から都に出て、事が終ると殷浩、劉惔にも会わずに帰って行った。人々は追いかけたが無駄であった。劉惔は「自分が会稽太守になっても、安石渚に停泊して、阮裕のそばには近寄るまい。阮裕はすぐに杖をつかんで打ってくるだろう。くわばら、くわばら」と言った。

元祿版には欄眉に「劉云」として、「安石渚は会稽の地名」の劉辰翁の注がある。安永版には、同じく劉辰翁の「劉云く、更に倫理無し」の評語が加わっている。

履軒はこれに対して、「是れ自ら簡傲なり。何の方正か之れ有らん」（10オ・欄眉）と評している。劉辰翁同様、阮光祿の行動に筋道をはずれたおごりを見て取っている。また、本文末尾の「打人不易」は、現在は「人を打たん。易からず」と訓み、「打ちかかってくるだろう。くわばら、くわばら」と解するようであるが、ここを元祿版では「人を打つに易からざらんや」と訓み、安永版は「人を易からざるに打つ」と訓んでいる。履軒は「撮云」として、釈大典『世説鈔撮』の「不易の言は豈に易からざらんや」の解を引く。ちなみに、平賀中南『世説新語補索解』は、「不易は易なり」である。皆川淇園『世説啓微』は、「尹は使ち杖を捉て人を打つことを能くすとも、易からず」と訓み、「我を打つこと易からず」の意と解している。近代の有朋堂文庫本岡田正之は「不易」を衍文として退ける。秦鼎の『世説箋文』に従ったものである。

卷七方正下の桓温の章は古世説に収められる（方正54）。次のような話である。

二人が桓温と覆舟山で酒盛りをしている時、劉惔が足で桓温の首をせめた。桓温は手で払いのけて帰って行った。王濛は

劉愔に、「桓温は手足や声で脅しても無駄だ」と言った。

履軒はこの章に対して、「王語は桓を畏れるなり。何の方正か之れ有らん」(10ウ・欄上)と評し、王濛の言は、桓温を恐れていることだと解している。また、一方で、元禄版の欄眉には「劉云」として、劉応登の「温を薄ろんずる語」という注がある。王濛の言は桓温を軽んじたものとし、履軒はこの注を墨書で抹消して、「礼法を滅絶するは、是れ何ぞ記して世説に載すべき。此れ等は後生の俊士を敗壞する処なり。懼れざるべけんや」と評している。しかし安永版には、劉応登注に加えて、「劉云」として、劉辰翁の「亦た且つ語を成さず」の注を加える。意味が分からない旨の本文批判である。

卷七方正下の羅君章の章は古世説に収められる(方正56)。次のような話である。

羅君章(羅含)が人の家にいた時、主人が他の客と話をさせようとしたら、羅含は、「私の知り合いはもう十分います。これ以上煩わさないで下さい」と言った。

履軒はこの章に対して、「是れ自ら簡傲なり。何の方正か之れ有らん」(10ウ・欄眉)と記す。簡傲は世説の篇名。おごりたかぶり、權威、礼教に逆らう人々を集録している。羅君章はそこに入れるべき人物であると言うのであろう。

六 雅量

卷八雅量下の顧和の章は古世説に収められる(雅量22)。雅量は教養とおおらかな心をもつこと。次のような話である。

周顛が王導を訪ねて役所に行くと、揚州従事となった顧和が月はじめの日の出仕に門外に車を止めて虱をとりつつけて中には入らないので、周顛が胸の中になにかあるのかと尋ねると、「はかりがたい」と答えた。周顛は王導に「あなたの所の役人には、大臣クラスの才能がある人物がいる」と言った。

履軒はこれに対して、「是れ簡傲のみ。何の雅量か之れ有らん」(1ウ・欄上)と記す。顧和を指して、これもおごりたか

ぶった無礼の振る舞いにすぎないと言うのである。

卷八雅量下の庾大尉（庾亮）の章は古世説に収められている（雅量23）。次のような話である。

庾亮が蘇峻に破れて、十数人の兵士と舟に乗って敗走したとき、兵の矢が誤って舵取りに当たり、船中が動揺した。その時、庾亮はおもむろに「この手並みでは、賊を近づけることはない」と言ったので、皆が落ち着いた。

履軒はこの庾亮のつつさの発言を「亦た何の雅量か之れ有らん」（1ウ・ノド）と評す。ここは射手の未熟と取るのと、練達を誉めたと取るのと、二様の解がある。履軒はこの記事のすぐ傍に、「一説に、亮の意射手の是の如きの剽勁を謂ふ。豈に賊をして近きに得さしめんや。著は相加ふの意」と亮のことはは射手のすばやさ強さを言っていると述べている。

元祿版には劉辰翁の評語が二つある。その一つに「この箭がもし賊に当たれば、当然弓射る度に倒れるであろう。いつわってその射芸のうまさ喜び、もってよるこぼせて安心させたのである」とある。劉評は射手の練達を前提にしている。ちなみにこの章は、庾亮の真意を巡って、古来難解の章であつたらしく、余嘉錫の『世説新語箋疏』を見ると、諸説をあげて多くを「解嘲の語」であると退ける。

卷八雅量下の謝安の章は『世説新語補』にのみ収まる。書き下し文は以下の通りである。

郗嘉賓は、嘗て三伏の月に謝公に詣る。時に炎暑薰赫として、諸人は復た風に当たり扇を交ふと雖も、猶汗に霑して流離す。謝は故絹衣を着けて熱白粥を食らへども、宴然として異なること無し。

郗嘉賓、郗超と謝安のエピソードである。謝安は猛暑の日に、着古した絹の衣服をつけて、熱い白粥を食べて平然としていた。

履軒は謝安のふるまいに対して、「何の雅量か之れ有らん」（2ウ・欄上）と評し、欄眉にその理由を「人暑に怯えざる者多く、寒に怯ゆる者、是れ病身のみ。若し寒暑皆怯えざれば、是れ健強の極みにして、驚劣の人多く之れ有り。何ぞ是れ賞さんや」と記す。やや通じない意見で、上田秋成の「学校のおとこ親父」（『胆大小心録』二十九条）という辛辣な履軒評

を思い出す文である。

同じく卷八雅量下の導安の章は古世説に収められる（雅量32）。次のような話である。

郝嘉賓は釈道安の高徳を敬慕して、米千石と長い手紙を贈った。道安の返事には、「せっかく米を送ってもらったが、かえってますます食わねばならぬ凡夫の煩わしさを覚えませう」とのみあった。

元禄版には、劉辰翁の「是れ道人の語」と道安の脱俗を賞賛している評語がある。履軒は「何の雅量か之れ有らん」（5オ・欄上）と評価しない。ちなみに郝嘉賓の章に続く謝公の章で、謝安が碁を囲んでいた時に、兄の子謝玄の戦勝の報が届けられたが、顔色と挙措を変えなかったという話に、履軒は「亦た是れ矯情にして、雅量に非ず」（7オ・欄上）と評している。履軒は雅量と見えるものの中に、多く本心を偽った不自然なものがあると見て取っている。

同じく卷八雅量下の楊再思の章は『世説新語補』にのみ収まる。書き下し文は以下の通りである。

則天の朝、宰相楊再思、晨に入朝す。一重車の將に牽いて正門に出んとするに値ふに、道滑にして牛前まず。馭者罵つて曰く、一群の癡宰相、陰陽を和し得ること能はずして、我をして匯行すること此の如く辛苦せしむ、と。再思徐に之に謂ひて曰く、爾が牛も亦た自ら弱し。他の宰相を嘖ることを得ざれ、と。

馭者は水があふれて車が進まないのは、宰相たちが責務であるところの陰陽究知を怠ったためだと罵っているのが、楊再思は、「おまえの牛も弱い。宰相たちを非難するな」となだめている。

履軒はこれを「恥無きの甚だしき、何の雅量か之れ有らん」（11ウ・欄上）と、楊再思を恥知らずであるだけのことであると批評している。

七 識鑑

卷八識鑑の許子将の章は『世説新語補』にのみ収録される。識鑑は人を的確に判断する見識のこと。書き下し文は以下の通りである。

許子将嘗て穎川に到る。長者の游多けれども、唯だ陳仲弓に詣らず。又、陳仲拳、妻の喪に還り葬る。郷人俱に至る。許子将独り征かず。或ひと其の故を問ふ。子将が曰く、太邱は道広し。広ければ則ち周くし難し。仲拳は性峻し。峻しければ、則ち通ずること少なし。故に造らざるなり、と。時人其の裁量に服す。

許子将、すなわち許劭は陳仲拳の妻の喪に際し、弔問に行かなかつた。その理由は、行ったところで一人一人に挨拶も出来ないし、激しい性格の陳仲拳には気持ちを通じない、というものである。

履軒はこれに対して、「是れ子将の前を護るのみ。何の裁量か之れ有らん」(14ウ・欄上)と目前の保身であり、見識のある判断ではないと批判している。

八 賞誉

卷十賞誉下、謝太傅の章は古世説に収められる(賞誉128)。賞誉は人物を賞賛した名言。次のような話である。

謝太傅(謝安)は安北(王坦之)のことを、「会えば飽きないが、去れば思い出せない」と評した。

履軒は「此れ之を貶斥すると謂ひて可なり。何の賞誉か之れ有らん」(2オ・ノド)と評している。誉めているのではない、けなしているのであると取っている。

九 巧芸

卷十六巧芸、鐘会の章は古世説に収められる（巧芸4）。巧芸は碁、書画等、伎芸の名人の逸話である。次のような話である。

能書の鐘会はいつわって荀濟北（荀勗）の字をまねて手紙を書き、荀濟北の宝剣を盗みだした。絵のうまい荀濟北は仕返しに、鐘会兄弟の新築の門の脇部屋に生き写しの父の鐘繇の肖像画を描いた。鐘会兄弟は悲しんで移り住むことが出来ず、新宅は廃屋になった。

履軒はこれに対して、「画は則ち妙なり。偽書の如きは何の妙か之れ有らん」（3オ・欄眉）と荀濟北の画のうまさを評価し、偽書を書いたことを批判している。

十 任誕

卷十六と卷十七にまたがる任誕篇は、礼教を無視して自由奔放にふるまう人物のエピソード集である。

卷十六任誕上の阮渾の章は古世説に収められる（任誕13）。次のような話である。

阮渾は風格やものごしが阮咸に似てきた。阮籍は、「仲容（阮咸）がすでにそうなのだから、おまえまで放達になる必要はない」と言った。

履軒はこれに対して「何の任誕か之れ有らん」（18ウ・欄上）と述べている。この評語の書かれた同じ欄上に、「籍の本意、未だ嘗て達を以て美となさず。抑も為すところ有りて、然るのみ。此の一条以て籍の心を見るべきなり。已に且つ仲容を懲らすなり」と述べる。阮籍の本意は放達をよしとしているのではない。目的があつてそうしているのであつて、この条を読めば、阮籍の本心が分かる。ここは竹林の七賢の一人、甥の阮咸（仲容）を懲らしたのであると言う。履軒は七賢は本心を偽って韜晦していると考えている。

卷十六任誕上の祖車騎の章は古世説に収められる（任誕23）。次のような話である。

祖車騎（祖逖）は江南に渡ったところ、公私に質素で、身の回りにものがなかつた。王導や庾亮らが祖の所に行ったとき、皮衣や綿入れなどが積み重ねられていたので、訳を聞くと、「劫奪したのさ」と答えた。

履軒は何の意味があつてここに収録されているのか分らない。削除した方がよい。これは賊であつて、「何の任誕か之れ有らん」（19ウ・欄眉）と述べている。その欄上には、祖車騎の賊姦が黙認されていても、いずれは誅罰を受けるであろうと述べている。

同じく卷十六任誕上の任愷の章は古世説に収められる（任誕16）。次のような話である。

任愷が権勢を失つてから、身を慎まなかつた。和嶠は人から友人の苦境を坐視してなぜ助けないのかと聞かれると、「任愷は洛陽の北夏門のようなものだ。音を立てて崩れようとするのを、一木で支えられるものではない」と答えた。

履軒はこれに対して「何の任誕か之れ有らん」（21オ・欄眉）と評している。和嶠の鷹揚を非情と批判しているのである。

十一 排調

卷十八排調の顧長康の章は古世説に収められる（排調59）。排調は相手をやりこめることである。次のような話である。

顧長康は甘蔗（サトウキビ）を食べるとき、しつぽの方から食べた。訳を聞かれると、「だんだん佳境に入るからだ」と答えた。

履軒は「何の排調か之れ有らん」（10オ・欄眉）と述べる。顧長康の言いぐさを、ばかばかしいと思ったのであろう。

十二 仮譎

卷十九仮譎の魏武と袁紹の章は古世説に収められる（仮譎1）。仮譎は人を欺くことである。次のような話である。

魏武（曹操）は若い時、袁紹と游侠し、新婚の家に忍び込んで「泥棒だ」と叫び、花嫁を略奪して逃げた。袁紹が茨の中で身動きできなくなると、曹操は、「泥棒はここだ」と叫び、あわてた袁紹は何とか自力で逃げ出した。

この有名な話について、履軒は「此れ疆姦凶賊なり。何の游侠か之れ有らん」（8ウ・欄眉）と断じている。

十三 紕漏

卷二十紕漏の任育長の章は古世説に収められる（紕漏4）。紕漏はしくじり。次のような話である。

任育長は聡明かつ美形で、晋の武帝の棺を担ぐ百二十人の一人に選ばれた。その中からさらに四人選ばれた王戎の娘婿の候補者の一人であった。しかし江南に渡ってから失意の時を過ごした。王導が彼をもてなすと、一見して以前の面影がなかった。酒が出ると、「これは「茶」か「茗」か」と聞いた。人々が怪訝な顔をしたので、任は「飲み物が熱いか冷たいかと聞いたのだ」とごまかした。王導はまた任が柩を置く宿の前を通りかかると、涙を流して悲しんでいたという話を聞いて、任を情痴あるもの（情におぼれる男）だと評した。

「茶」か「茗」のくだりは、陸羽『茶経』にも採られてよく知られている。精神衰弱して、酒と茶を間違えたのである。

履軒はこの章に対して、欄眉で「此れ何ぞ載するに足らん」と述べた後、行間に「任只だ是れ虚耗心疾のみ。怪しむに足らん。亦た何の情痴か之れ有らん」（8ウ・行間）と書き付けている。心身耗弱の病に過ぎない。情におぼれるとまで言う必要がないと述べている。これは人を知る言であろう。

十四 おわりに

『世説新語補』中に登場する人物について、履軒評は概して以上のような厳しい評が目立つ。袁褰序への批判が履軒の『世説新語補』評価を端的に表している。世説の人物が国家の存亡、世情の混乱をよそにして、清談詩文酒食にふけるのを評価に値しない厳しくと断ずる。放達も韜晦の所為であつて、それ自体をよしとはしないとも言う。また、方正ということに厳格であつたことも特色である。江戸の護園派とは異なり、大坂の懷徳堂主として、堅実な生活者の有用の学として経世済民の学を講じた立場が明確である。

加地伸行は『史記研究書目解題』の編者・池田四郎次郎が履軒の『史記雕題』を評した言を取り上げて、「履軒は清朝考証家が博引旁搜して証拠を羅列するが如きを做さず。直ちに胸臆に据りて断定せり」と述べているのが(注5)、これもそのまま『世説新語補』に当てはまる。履軒は率直明快である。

註

(1) おおまかに言えば、履軒批校本と称すべきものであるが、書き入れの内容が多岐にわたるため、以下単に書き入れと称す。またこれらが全て履軒によるものとも断定できないが、今このことについては考えない。『李卓吾批点世説新語補』の明版および和刻本の諸本については、稲田篤信「和刻本『世説新語補』書入三種」(『日本漢文学研究』八、平成二十五年)参照。巻首題下の著者名には「宋劉義慶撰／梁劉孝標注／宋劉辰翁批／明何良俊增／王世貞刪定／王世懋批釈／李贄批点／張文柱校注」とある。

古世説から『世説新語補』に新たに追補された章の書き下し文は、履軒が用いた元禄版を元にして作っているが、戸崎允明による安永校正改刻版、また近代の岡田正之による有朋堂文庫本(秦鼎の『世説箋本』に基づく)を参考にして文意の通るように改めている。各章の要約は川勝義雄・福永光司・村上嘉実・吉川忠夫訳筑摩版世界文学大系『中国古小説集』ほかの諸家の訳注に恩恵を受けた。各章の番号も同書による。

(2) 北村沢吉『漢文法助字要訣』中文館書店、昭和十一年。

(3) 佐藤進・濱口富士雄『全訳漢辭海』三省堂書店、二〇一一年第三版。

(4) 南昌宏「中井履軒撰『古文真宝雕題』について」〔懷徳〕六一 平成五年一月。

(5) 加地伸行「中井竹山・中井履軒」明徳出版社、平成四年第六版。『史記研究書目解題』は、明徳出版社、昭和五十三年刊。

〔附記〕 懷徳堂文庫蔵『世説新語補』の閲覧に際して、大阪大学附属図書館のご高配をいただきました。記して感謝いたします。

なお小稿は、平成二十五年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「『世説新語補』を事例とした近世日本の明清漢籍受容史の研究」の成果の一部である。

【キーワード】

・中井履軒 ・雕題本 ・和刻本 『世説新語補』 ・書き入れ ・世説批判